

『ふたりフォトグラフ　　一緒に暮らす毎日、これからも』

特典シナリオ台本

## 【登場人物】

赤根美彩（あかね・みさ）

あなたの大学時代の写真サークルの後輩で、恋人。同棲歴は3年目。妹を持つ長女であり性格はしっかりしているタイプ。だが、だからこそ、年上の恋人のあなたに甘えることが大好き。

前向きで頑張り屋だが、頼みごとを断れないお人よしなところが災いして、現在の職場で忙しさが極まってしまい、転職を考えた。今日までの心残りは「同棲っぽいことしてない気がする！」ということ。

掃除や料理、細かく地道に積み重なる仕事が好き。

写真サークルに入った動機は「SNSで見栄えのいい写真をアップしたい！」だった。撮影機材は主にスマホ。

卒業後は忙しくてSNSの更新もおろそかに……。転職を果たした今、「やりたいことリスト」の達成に意欲を燃やす。

《年齢》 25歳

《身長》 159センチ

《バスト》 D

あなた

フリーランスのグラフィックデザイナー。

大学で写真サークルに入った理由は、グラフィックデザインの素材撮りのため。撮影機材は小型のデジタル一眼レフ。

現在は在宅勤務で、いつも美彩に「いってらっしゃい」と「おかえりなさい」を言う暮らしを気に入っている。

マイペースなのんびり屋で、仕事は×切前に集中して取り組むタイプ。

忙しい美彩を支える気分は新妻。

だが、実は家事全般が得意なのは美彩のほう。

美彩とは大学那时的写真サークルで出会う。美彩のほうが後輩だが、何かと頼もしい。美彩の就職を期に同棲を始め、三年が経つ。

## 【あらすじ】

あなたは、大学の写真サークルで一つ年下の美彩と出会い、恋人になった。

美彩の卒業を期に同棲を始めたものの、美彩の職場は多忙で：

せっかく同棲を始めたのに仕事ばかりの日々を悔いた美彩は、残業の多い会社からの転職を考えていた。

美彩の転職までの心の支えは「転職できたらやりたい同棲っばいことリスト」、略して「やりたいことリスト」。

思い描いた通りの同棲生活を送れなかった日々を、あなたと一緒に挽回したいと思っていた。

このたび美彩の希望が叶い、新しい会社に入社するまで束の間のおやすみ期間を得ることに。いよいよあなたと一緒に念願の「やりたいことリスト」の達成を目指すのだった。

【EP01】今日は特別な日だから】

---

○ 駅前

送別会を終えて帰ってきた美彩。  
駅前まで迎えに来たあなたに気付く。

「……あれ」

「あれえー、せんぱい。え、買い物の帰り？  
（嬉しそうに）持ちますよ荷物、持ちますよ。  
（荷物を受け取って）んしょ」

あなたの買い物袋を受け取る美彩。  
かわりに、送別会で貰った花束を渡す。

「先輩は、かわりにこっちお願いします。  
ふふー、きれいでしょう？」

「花束を貰うなんて、いつぶりですかね。  
卒業式でももらわなかったし」

「あたしは職場に穴をあける人間なので、  
なんか悪い気がしますけど」

「まあ、どんな理由で貰っても花は綺麗ですね」

「あ。先輩、もしかして迎えに来てくれたんですか？」

「……あたしに会いたかったとか？」

「えー、ほんとにー？ 嬉しいー」

「先輩そういうところ何とかかわいいですよ」

「……えへへー、一緒に帰りましょう」

歩き出す二人。

「なんか、仕事のカッコと一緒に帰るのって珍しいなあ……（笑う）」

「先輩。今日の晩御飯、何食べたんですか？ 外食？」

「そばろ！ あたし、先輩の作ったそばろ大好き」

「まだあります？ やったー♪」

それ帰ったらつまみにしたいなあ」

「んー、今日のは、まあ、送別会というのは名ばかりというか」

「お世話になった上司とか同期とか、まあ片手で数える程度なんですけど、一緒にちょっと飲んだくらいで」

「うん、まだお腹入る。ぜんぜん入る」

「食べたいなー。食べるー（笑う）」

買い物袋を覗き込む美彩。

「あ。お酒も買ってくれてる。あ、ケーキだあ。  
えー、やだ、言ってくださいよー」

「先輩が準備してくれてるの知ってたら、  
もっと早く切り上げてきましたよー」

「ふふ……（ご機嫌に笑う）ありがとうございます」

「ついたー」

「（おかえり、と言われて）……はい。ただいま、せんぱい」

「……ふふ。（冗談めかし、改まった様子で）  
わたくし赤根美彩、無事、脱出成功いたしました」

「ダークグレー企業……  
いやもう率直にブラック企業か？、念願の退職……！」

「転職活動の応援、今までありがとうございました」

「次の職場では、もっと人間らしい働き方が期待できますので……」

「ご心配おかけしました」

「……まず、飲みましょうっ」

「（部屋の匂いを嗅いで）あー、おしょうゆとみりんの匂い」

「癒される……」

「わ、けっこうお腹空いてるかも。普通に食べちゃいます」

「もしかして、作り置きのもりでした？」

「……えへへー、では遠慮なく」

ソファに隣り合って座るふたり。

「（ソファに腰かける。吐息）……」

「いただきますっ」

「……こっちも、いただきますーす」

「へへ……かんぱい」

「んっ、ん……（お酒を飲む）……はあ」

「ん……（つまみを食べる。咀嚼音）」

「……はあ（幸福そうな吐息）」

「おいしーです。先輩」

「……いやー、先輩のほうもお疲れ様でした」

「あたし、家のこと全部先輩に任せきりにしちゃって」

「ほんと先輩のこと支えるつもりでいたのに」

「仕事が始まったら怒涛すぎて……ビビりました」

「いや、みんなこんなかんじなのかな？　って思ってたんですけどね」

「誰に話聞いても『そこはおかしいから辞めろ』とか言うし」

「ていうか上司も『他探しなよ』でずっと言ってくれてて」

「採用する前に言っただけ？（笑う）、  
でも、おかげで転職のことは切り出しやすくて、感謝です」

「……（一息つく）」



「（しみじみと、あなたにだけ聞こえる声量で）……これからは、もっと。もーっと、先輩と一緒にいられますよ」

「……（小さく笑う）」

「ん……（お酒を飲む）」

「……（つまみを食べる咀嚼音）」

「先輩も、×切は？ 今日でしたよね。間に合った？」

「おおー、えらいです。えらいっ」

「じゃあ明日からは……休日、ばっちり合いましたね」

「うれし〜……！」

「やだ、ちょっと涙出ますね。へへ、そうそう、泣き上戸だから」

「思い出す（笑う）、先輩の送別会とき。サークルのとき」

「ねー、あたしめっちゃ泣きました」

「おかげで、勢いで先輩に告げましたけど……（照れ笑い）」

「なつかしー。もう大学の頃がはるか遠い記憶です。  
まだ三年くらいしかたってないのに」

「あ、そだそだ」

スマホで卓飲みの様子を撮影する美彩。

「退職＆転職記念に、缶チューハイ」

「……先輩も、一緒に写りましょ」

あなたに身を寄せる美彩。

「明日からは、丸一ヶ月の休暇ですっ。ぴーす」

「へへへ……」

「せんばい、顔赤い。ちょっとしか飲んでないのに」

「ふふ、相変わらずです」

「（耳元に囁き）かわいい」

「……（お酒を飲む）」

「……（満足そうな吐息）」

「はあゝ……、……（あくび）」

気が抜けて、段々眠気におそわれる美彩。

「仕事辞めるって、はじめて体験するかんじの解放感……」

「いや、これは癖になったらヤバイやつです……（小さく笑う）」

「あたしは、もっともっと稼ぐんでっ」

「それで、先輩との暮らしをもーっと良い感じにしたいな」

「これまでの分、リベンジですよ」

スマホを操作する美彩。

「……ほら、見てください」

あなたと肩を寄せ合い、スマホを覗き込む。

「じゃーん。これ」

「『転職できたらやりたい同棲っぽいことリスト』」

「略して『やりたいことリスト』（笑う）」

「えっと……（リストを読み上げる）先輩と一緒にゆっくりコーヒー飲む」

「先輩と一緒に朝ごはんたべる」

「先輩と一緒に散歩する……などなど……」

「……いや、切実な目標だったんですよ今日まで」

「明日からひとつずつ達成していきますので」

「（笑いながら）どうぞよろしくおねがいします」

「へへへ……（眠気）」

「……ん……」

あなたの肩に頭を預ける美彩。  
お酒も回り、かなり眠たげ。

「ふぁ……。ねむ……」

「うー、そぼろ……残り明日食べます……」

「……………お風呂入らないと……あー……」

「……………」

「（眠気が極まって、不鮮明に）はいります……」

「……………（寢息）」

「（ほとんどわからない程度に寢言で）……せんぱい……」

【EP02「朝は淹れたてのコーヒーを嗜む」】

○ダイニング

朝。空気を入れ替えるため、窓を開けている。

鳥の声や電車の走行音、道路の交通音が聞こえてくる。

美彩がシャワーを浴びている音がドア越しに響いている。  
やがてシャワー音が途絶える。

ドア越しに、タオルで身体を拭く音。

「〜♪（鼻歌）」

「きょうからむしょく〜♪」

「〜（鼻歌）」

ドア越しの鼻歌。ドアが開き、鮮明に聞こえる。  
ドアから半身を出す美彩。

「あ、せんぱい。おはようございます」

「……（苦笑しながら）昨日はすみません、  
結局寝落ちしてしまった」

「おふとんかけてくれて、ありがとうございます」

「（噛みしめて）先輩の優しさに包まれて眠ってました。最高……」

「ここ最近でイチバンきもちよく寝てたかも……（小さく笑う）」

「あ、ちょっと待って。すぐ着替えます」

「そうだ。コーヒーまだ飲まないでね。あたしが淹れるから」

「今日はおきですよ。待っててくださいっ」

ドア越しに着替えの音、ドライヤーの音。

「んしょっ……、……（着替えるアドリブの吐息）」

ダイニングに出てくる美彩。

「へへー。お待たせしました」

「……これです」

コーヒー豆の袋を持ち上げる。

「コーヒー豆。……いいやつです」

「しかも、豆のまんまです」

「……挽きますっ」

「はあゝ（嬉しい嘆息）、これやりたかったあゝ……」

「いざ……、んっ（ハンドルを回す）」

「おっ……結構……（豆を挽きながら）」

「ちから……しごと……（笑う、豆を挽きながら）」

「よしっ……やるぞーっ……（豆を挽きながら）」

「……（豆を挽きながら、吐息、微笑み）」

「あ、先輩。お湯沸かしてもらっていいですか？」

「忘れてました。任せます」

「……（豆を挽きながら、吐息）」

「そのケトルでお湯沸かすの、めっちゃ久しぶりですね」

「ホーローのケトル……やっぱかわいい」

「……部屋にあるだけで幸せ」

「だけど、実際に使えてもっと嬉しい……」



「（豆を挽きながら）……あ、いい匂い」

一度ミルを開けて、匂いを嗅ぐ。

「（改めて嗅いで）いい匂いっ……!」

「先輩もほら、これ良い……  
コーヒー屋さんの匂い」

「……ね?（笑う）」

「ふー……、ちょっと休憩（小さく笑う）」

「……（心地よい吐息）」

沈黙が続く。

「はー……すごい。朝、こんなにのんびりするとか……」

「（笑いながら）ぜいたく……」

「……（吐息）」

「よし、もうちょっとがんばろっかな」

「さあ、……（豆を挽く吐息）」

「お。そっちもいいかんじですね」

「では、こちらそろそろ……」

ペーパーフィルターをコーヒーマーカーにセット。

「フィルターを……」

「……（作業に伴う吐息）」

フィルターに挽いた豆を入れる。

「……できた、っと」

「お湯……も、ばっちり沸きましたね」

「……えーと、まずは蒸らす程度に……（お湯を注ぎ始める）」

「で、三十秒ですね」

「（見回して気づく）……この部屋時計ないんだ」

「スマホ……あ、ソファの上置きっぱなし」

「先輩お願いします、数えてますから」

「ええと……十五？　十六？　十七、十八、十九……」

ソファまで美彩のスマホを取りに行くあなた。

「にじゅー、にじゅいち、にじゅに、にじゅさん、にじゅし……」

「にじゅご……（笑って）、にじゅろく、にじゅしち」

「にじゅはち、にじゅく。……さんじゅ」

スマホを受け取る。

「（笑いながら）スマホありがとうございます。  
ざっくりですが、蒸らしは終わります」

「結局ね…使わなかったね。  
ふふ、でもスマホはこのあと必要なので……」

「あ、そうだ。撮って先輩、コーヒ―淹れてるところ」

再びスマホをあなたに渡し、撮影を任せる。

「そろそろさす」

「ありがとうございます」

「……良い匂い」

「うまい具合に泡できてます。  
すごーい……ふんわり……」

「……様子を見つつ、お湯を足して……」

「出てる出てるっ……」

「……（楽しみに待つ吐息）」

「（お湯を注ぎながら）……もういいかな？」

「あとは待つだけ……」

「あ、スマホどうもです。撮影代ります」

「ふふ……かわいいケトルに、かわいいコーヒーマーカー……」

「そしてパジャマのかわいいせんぱい」

「はぁ……うれしい」

「……できましたね」

スマホをポケットにしまい、  
コーヒーをカップに注ぐ。

「いいかんじ……いいにおい」

「先輩、これベランダで飲みませんか？」

「今日は陽射しぽかぽかだし」

「ねっ。行きましょ」

ベランダで並ぶふたり。

「わー。めっちゃ清々しい……」

「だいじょうぶです？ はだぎむくないですか？」

「（笑いながら）よかった」

「では、いただきまーす……」

「ん……（カップに口をつける）」

「……（コーヒーを一口飲む）」

「はぁ……沁みる……」

「（飲む）……おいし……はぁ……」

「暫定、人生でいちばんおいしいコーヒー……」

「なんかやっぱ挽きたてが美味しいんですね」

「ふふ……、いろいろな条件が影響してるのはありますね」

「一番は、先輩が隣にいるから。かな？（笑う）」

「はぁ……最高……（コーヒーを飲む）……」

「……しかもまだ九時前」

「……（飲み、一息つく）」

「……（景色を眺めて）お……、ランドセルの行列だ。そうだね、今日平日か」

「あの電車、あたしがいつも乗るやつかな……」

「……へんなかんじ」

「パラレルワールドっぽい……なんか……（ぼんやり笑う）」

「ここからじっくり街眺めるのも、内見のとき以来ですよね」

「いい景色だな……もったいないことしてた」

「……」

ポケットからスマホを取り出す。

「先輩も、一緒に」

「（笑いながら）寝癖でモーニングコーヒー記念」

身を寄せ合い、自撮り。

「わーい」

「……せんぱい」

「コーヒー、おいしいですね」

「……ふふ」

「……（コーヒーを飲む）」

「……（飲む）」

「せんぱい」

「（笑って）呼んでみただけです」

「……（コーヒーを飲む）」

「……………（飲み、微笑む）」



【EP03：いじいじ、ばしゃばしゃ】

---

○ダイニング

キッチンに立つ美彩。

「……よし」

「これは証拠写真。このキッチンが、いまから綺麗になります」

「あ、先輩はゆっくりしてて。コーヒーおかわりいます？」

「はい、どうぞ」

「（笑って）……はい、そこで見ててください」

「まずはメラミンスポンジを……切るっ」

「（切りながら）使いやすい大きさに……」

「（切りながら）おお……なんか楽しい……」

「……できた」

「キッチン、ぴっかぴかにします」

「換気扇のフィルターと、コンロ。  
ずーっと放ったらかしちゃってたから……」

「あたし、こういうお掃除大好きなんですよね……」

「もどかしかった……」

「……この部屋の換気扇、外すのはじめてですよね。  
……三年分か。……よし」

「よいしょっと」

踏み台に乗る美彩。

換気扇フードに頭を入れて、換気扇を見上げる。

「お、ここだ……ねじ？　ねじってほどでもないな……んっ、とれた」

ストッパーを外し、換気扇のフィルターを外す。

「おおお……おおお……これは結構……（汚れに驚く）」

「揚げ物とかもしてるから……多少がんこかも？」

フィルターを新聞紙の上に置く。

「あー。去年やりましたよね、てんぷら祭り。先輩のてんぷらおいしかったなあ……」

「いいんです。先輩はどんっどん汚してください」

「それであたしに美味しいもの食べさせてください」

「片付けと掃除は、あたしやりますんで」

「さ、重曹くん。出番だよ」

重曹をフィルターに振りかける。

「さらさらさらーっと……」

「……（粉を振りかける）まんべんなく……よしっ」

「そしてしばらく放置っ」

「そのあいだに……コンロの掃除♪」

「スポンジくんの出番だね」

「ㇿㇿ♪（掃除を楽しむ鼻歌）」

「（小さな声で歌って）ぴかぴかになっちゃうよー、ぴかぴかになっちゃいなー♪」

「落ちる落ちる……♪」

「はぁ………たまらん………」

「………（るるんした吐息）」

「先輩も、やってみます？」

「どうぞどうぞ」

美彩の隣に行くあなた。

「これ、水つけるだけですごいよく落ちるんです」

「ほんと。洗剤いらないから手荒れも回避です」

「どうぞどうぞ、このへんとか………」

「………ねっ？ 想像以上に落ちるでしょ？」

「はい、お試し期間終了。

あとはあたしがやるんで、先輩はのんびりしててください」

「先輩だって、昨日まで睡眠時間削ってお仕事頑張ってたじゃないですか」

「これは、あたしがやりたかったので………  
楽しみにしてたので」

「それに、先輩にはこのあと美味しいランチを作ってもらいますからっ」

「はい。おすわり〜……（あなたが座ったのを見届け、笑う）  
はい、それでＯＫです」

「あ、そろそろお湯沸かそう……（電気ケトルのスイッチを入れる）」

「ん。よし。ん……（スポンジで磨きながら）……」

「ん………（磨きながら）……」

「（歌うように）ぴかぴか…ぴっかぴか…」

「うん、いい……かん、じ…（磨きながら）」

「はい。仕上げに……っ」

布でコンロを拭きあげる。

「できたっ。ぴかぴか……」

「で、寝かせたフィルターのほうも……（換気扇フィルターを確かめる）」

「うん。油汚れが浮かんでますよー」

「お？ 先輩、重曹使ったことないですか？」

「これ結構楽しいんですよー」

「でっかい汚れを拭って……ん……」

「で、ここにお湯をかけて……」

「来てください、先輩。ほら、しゅわしゅわ」

「……はぁ、楽し……（満足そうな吐息）」

「……ふふ」

「ちょっと……夢中になる……」

「あ、写真」

「……（笑って）ぜんぜん、映えない」

「ほら見てください。何が映ってるのか……あわあわで」

「こういうのは、むしろ動画？  
タイムラプスとか」

「そういうのだと楽しかったかもですね。また今度だなー」

「……先輩、はりきって汚しちゃっていいですからね」

「ふふ……（笑って）頼みましたよ、せんぱい」

【EP04：「緒にお散歩をする」】

---

○夜道

銭湯の玄関。のれんをくぐり、外へ出てきたふたり。  
湯上りの肌に夜風があたる。

「ひゃー……涼しい。夜もうこんなに涼しいんですね」

「もう夏が終わったんだなあ」

「まあ、日中はまだまだ暑いですけどねー」

「んーっ……（伸びをする）」

「気持ちよかったあ……おっきいお風呂……」

「ここ、煙突結構遠くからでも見えるんですね……っと」

「んふふ。銭湯記念♪」

「『近所に銭湯あるんだ、いいなーって』ずっと思ってたけど、  
やっと来れましたー……」

「めっちゃ良かった……」



「やっぱ銭湯で飲むコーヒー牛乳ですよ……  
世界でいちばんおいしいコーヒー牛乳……」

「そうです。コーヒー牛乳部門の世界一」

「コーヒー部門の世界一は今朝先輩と一緒に飲んだやつなので」

「……あでも、次はフルーツ牛乳にしようかなー」

「先輩の、おいしそうだった。っていうか、ビビりました」

「銭湯に来て、コーヒー牛乳以外を選ぶひと、いるんだ……!? って」

「え、合宿のとき? 飲んでました?  
えー、知らなかったあ」

「ふふふ……」

「……付き合い長くなっても、  
まだ『知らなかった』って言えるの嬉しいですね、せんぱい」

「まだまだ、先輩の知らないところ見えるんだなあ」

「(笑って)……嬉しい」

「……(心地よい吐息)」

「ねー、せんぱい。手を繋いでもいいですか？」

「ありがとーございますっ。ん（手を繋ぐ）」

「ふふ……ぽかぽか」

「あったまりましたねえ」

「まだちょっと汗かきますねえ。涼しいとはいえまだまだ……」

「風が止むとちょっとむしむしですなあ」

「……（上機嫌な吐息）」

「お？ こっちから帰るの？」

あなたに手を引かれ、従う美彩。

「（あなたの話にうなずいて）へー、散歩コース」

「ちゃんと日課にしてるんですね。いいなー」

「いや、大事大事。」

フリーランスのデスクワーカーは、歩くだけでも大事ですって」

「では、案内してください。先輩の散歩コース」

「遠回りして帰りましょう」

「……明日の予定もありますけど、まだ眠くならないし」

「（笑いながら）明日のことが楽しみで……」

「そう、遠足前症候群。小学生みたい」

「……ふふ」

「……（吐息）」

「……（長めに吐息）」

「あー……鳴いてる虫も秋の子ですねえ」

「蝉の声、いつの間にか聴かなくなりましたねえ……」

「んー、ちょっと寂しい。今年の夏はぜんぜん夏っぽいことしてないし」

「忙しかったですからねえ……」

「でも、来年の夏こそは。夏らしいこと、いっぱいできますから」

「そのための転職活動。がんばりましたんで（笑う）」

「……（吐息）」

歩く二人。

「…………（リラックスした呼吸）」

「……今日、すごく不思議な感じ」

「なんかね、先輩に『行ってらっしゃい』も『おかえり』も言われてないから」

「それがないのはちょっと物足りないかも……？」

「でも、いつもよりずっと一緒にいられるのはすごく嬉しいー！（笑う）」

「飽きないですよ。まだまだ知らない先輩を見つけられますから」

「へへ……明日は、電車で40分くらい。  
新宿乗り換えで、高尾行きの中央線。で、立川まで」

「……おっきい公園の、一面のコスモス畑。楽しみですね」

「大丈夫ですよ、先輩。明日は天気予報もぴっぴかの晴れマーク」

「（笑って）そうそう、サークルのときはね……雨だし肌寒いしで」

「だれか雨女だったんですかね？」

「まあ、写真撮るのに小雨ならまあまあ悪くないですけど」

「でも青空の下だとゼッタイ気持ちいいですよー」

「……楽しみ」

「あたしもあの頃よりは腕が上がったっていうか、  
機材がよくなってるので。……スマホですけど（笑う）」

「いっぱい写真撮りましょうねー」

「かわいいカフェも近くにあって、気になってたんです」

「ふふ。映えーるスイーツ、食べましょうー」

「……♪（上機嫌な吐息）」

「……（長めに吐息）」

「……（深呼吸）はぁ……」

「先輩、もう金木犀の匂いありません？  
はじめて気づいた」

「えー、気づいてたんですか。そっかあー」

「（深呼吸。金木犀の香りを嗅ぐ）……はあ、気づいてしまったなあ……」

「もう秋だ。完全に秋だ……」

「ん、いいにおい。……ん？ すんすん」

「先輩からもいいにおいする……すんすん」

「すう、はあー（つむじを嗅ぐ）……お風呂上がりの匂いだ」

「ふふ。いいにおい……（深呼吸）」

「……嗅ぎ過ぎました。すみません（笑う）」

「お？ あ、ここに出るんだ」

二人で暮らすマンションが見えてくる。

「こっち側から帰ったことないから、新鮮……」

「あ。先輩、ちょっと待っててください」

「……（ドアを閉じる）」

先に部屋に入る美彩。

「……（笑う）」

「……先輩っ、おかえりなさい」

「（笑って）あたしはなかなかこれ言えないから……  
ちよっとやってみてくださいました」

「おかえりなさい、せんぱい」

「……（唇に口づける）」

「……おかえりなさいのチューです」

「……（小さく笑う）」

【EP05：映える素敵な写真を撮る】

---

○公園

公園についた二人。

「おお……咲いてる咲いてる」

「すごい……（あたりを見渡す息づかい）」

「今は、咲き始めの時期なんですよ。

このあと本格的な冬がくるまで、見ごろが何度かあるみたいで」

「秋、満喫ですね」

「……今日は秋にしては暑いなあ？」

「でも、思った通り空いてます」

「平日の真昼間ですからね」

「先輩、予定合わせてくれてありがとうございます」

「お仕事のスケジュール、ほんとに大丈夫ですか？」



「おおー……スケジュール管理できる人。えらい。ぱちぱち」

拍手する美彩。

「あ、偶然？　ちよっと、そこはネタばらししなくてよかったのに……（笑う）」

「じゃあ、神さまがくれた気の利いた偶然ってことで、  
ありがたく楽しませてもらいましょうっ」

「……ちよっと歩きますか」

「撮影スポット、いい感じのそこ見つけましょう」

「（手を繋いで）……えへへー」

「こうやって手を繋ぎたいから、リュックを選んできたあたしです」

「今日はおてて、先輩専用にあけてますんで」

歩く二人。

「……風もきもちいいですね」

「……（長めに呼吸）」

「……先輩。いいところ見つかりそうですか？」

「（小さく笑う）ゆっくり探しましょう」

「……（長めに呼吸）」

「あゝ……木陰涼しい」

「昨日は夏とさよならした気でいたけど、  
まだまだ全然、残暑が厳しいなあー」

「……（吐息、長めに）」

「……このへん、一面ずーっとコスモス畑でいいかんじ」

「そろそろチャレンジしようかな」

立ち止まる美彩。

「んしょ……（しゃがむ）」

カメラ（スマホ）を構える。

「ん……（画角を決める）」

「ん……（真剣な吐息）」

「……」

美彩を撮影するあなた。

美彩はまだ気づかず、スマホでの撮影に夢中になっている。

「ん……」

「ん？ ……あれ。……先輩？ あたしのこと撮ってる？」

「ちょっとー（照れ臭くて笑う）いいですけどー」

「むしろ、もっと撮って下さい。

先輩がポートレート撮ってくれるなんて嬉しい」

「先輩、あんまり人を撮らないですよね？

たまーにしか見たことなかった」

「サークルの講評にも出したことないでしょう。

いいの撮ってたのになーって、意外だったんです」

「（あなたの話を聞いて）へえ……先輩でも自信ないことってあるんだ……いや、意外です」

「自分の道進んで、自分で決めて、自分でスケジュールも立てて……フリーランス、かっこいいなあーって思ってたから」

「サークルのときも、副部長だったし……」

サークルの実権を握っているのは先輩だって噂でした（笑う）」

「……また先輩の知らないところ見つけちゃった」

「記念の、一枚っ」

「（まぶしそうに、見惚れて）……せんぱい」

「（吐息）……ふふ、もろに逆光でした」

「でもかっこよく撮れたかも」

「……（立ち上がりながら、アドリブで吐息）」

「今日はあたしも被写体やります。  
どんどん撮って、練習に使ってやってください」

「はい。こちらこそ、よろしくおねがいします（小さく笑う）」

「行きましょう」

歩き出す二人。

「（満足そうに深呼吸）……はあ」

「（満足そうに）いいなあ」

「いい過ごし方できてます。ほんと」

「『あゝ……自由なんだ』って……」

「憧れてた理想の同棲生活と、だんだん重なってきました」

「ふたりで一緒に朝ゆっくり過ごせるのもすごく嬉しいし……」

「こんなふうにお出かけするのもすごい久しぶりだし」

「……うん。今までだって、先輩との暮らしは最高でしたけどね」

「忙しすぎて、そこを噛みしめる余裕がなかったのが勿体ないなあ」

「遅くに帰ってきたときも、先輩の寝顔、眺め放題だった」

「（笑って）……いやー、見てましたね。じっくりと」

「写真には……どうかな？撮ったかな？撮ってないかな？」

「内緒です……（笑う）」

「あとあれ、あの、夕飯の」

「ラップに、ペンでメッセージ書いてあるのも嬉しかった！」

「あれ、すごいんですよ。かなり体力回復します」

「捨てちゃうのがすごいい勿体なくて、置いてくんですけど、朝起きるとなくなってる……（笑う）」

「もー、先輩なんで捨てちゃうの。……照れてるの？（笑う）」

「逆にあたしがそういうことする機会って、あるのかな？」

「先輩、けっこうしっかりしてるしなあ……」

「どんどん頼ってもらえるように頑張りますっ」

「それで、先輩ももうちょっとゆる〜んと暮らしてください」

「ゆる〜んと。だら〜んと……（笑う）」

「あ、ほらこれ。写真出てきました、これ」

立ち止まって、美彩のスマホを覗き込むふたり。

「これ、先輩のくれたラップのお手紙」

「……ひと言だけでも、それが嬉しかったんですって」

スマホを操作（スワイプ）する。

「このときのそぼろご飯も、  
味が沁みてて美味しかった……」

「先輩のご実家から送ってもらった沢庵も、  
すっごく美味しかったです」

「また送ってほしいって、伝えておいてくださいね」

「……あ、待って先輩、それ以上スワイプすると……」

「あゝっ、だめー。だめですーっ」

「いやほら、この寝顔はほら、あたしの特効薬なんです」

「疲れが一気に吹き飛ぶんです、ほんとに」

「……ううー……だめ？」

「……わかりました。削除します」

「この目に焼き付いてますから……いいんですっ……」

「勝手に撮ってごめんなさい、先輩」

「（許してもらって）……優しい……ありがとうございます……」

「……消した分の写真は、今日増やして帰ります」

「先輩あたしにも撮らせてくださいっ」

「……（笑って）それじゃあ、撮りっこしましょうね」

「場所は……あ」

「あの木のあたり、いいかんじじゃないですか？」

「行きましようっ」

見つけた撮影スポットを目指して、歩いていく二人。



【EP06：先輩とのんびりお風呂に浸かる】

---

○浴室

外出から帰ってきたふたり。  
お風呂に一緒に入る。

「おじゃまします」

「お待たせしちゃってすみません。のぼせてないですか？」

「ふふふ……これを用意していたのです」

「じゃーん」

「さっき買った防水ケース。  
お風呂でスマホができちゃう、最高のやつですよ」

「今日からは、湯舟にゆっくり浸かる生活に切り替えていきますよ」

「そこそこ広いバスルームがあるのに、  
シャワーだけなんて勿体なかったの。満喫しちゃいます」

「……ここで一緒に入るなんて、なんか照れますね」

「昨日一緒に銭湯行ったくせにね（笑って）」

「いや、距離が近いもん……照れます」

「なにか曲とかかけます？　せっかくスマホがあるし」

「……と言っても、髪洗う時聴こえないですよね」

「よいしょ……では先輩、

こちら新しいシャンプーとトリートメントです」

「あとこれ、ヘアオイル。試してみましょう」

「こちらへどうぞっ」

湯舟からあがるあなた  
椅子に腰かける

「タオルいります？

だいじょうぶ？　はい」

「では、まず髪をとかします」

「ん……（真剣な吐息、長めに）」

「先輩、改めて下ろすと髪長いですね」

「ん……（真剣な吐息）」

「（とかしながら）これくらいで……よし……」

「では、オイルパックしてみますよ」

「髪全体になじませて……」

「ん……（真剣な吐息）」

「こういう家で初めてやる……」

「（笑って）ね、いい匂いしてきましたね」

「丁寧になじませてまーす」

「ん……ん……（動作に伴う吐息）」

「やっぱり毛先は傷んでるなあ……  
んー、よしよし、たっぷり馴染ませよう」

「もうつやつや。ふふ……」

「手触りもきもちいい……」

「……（集中する吐息）」

「（なじませながら）こんなかんじで……」

「……できた」

「ぬるま湯で優しくゆっくりすすぎまーす」

「先輩。下向いて、おめめギュッとしててくださいね」

「流していきますよー。……ふふ、楽しい」

「♪（鼻歌、長め）」

「きれいになーれ、きれいになーれ……」

「……こんなかんじかな？」

「先輩、目に入ったりしてないですか？ 大丈夫？」

「よかった。……ふふ。」

「ゆずのいい匂い、ふんわり香りますね」

「今日はゆずセットですから。まだまだゆずが香りますよ」

「じゃ、次はシャンプーです」

「シャンプーは、あんまり出し過ぎず……よく泡立てて、優しく……」

「（なじめせながら、自分に言い聞かせて）  
優しく……優しく……」

「ん……先輩、痛くないですか？」

「（なじめせながら）……髪長いから……絡んじゃいそうで」

「大丈夫？ ……ん。じゃ、続けまーす……」

「……（集中する吐息）」

「……ふふ……」

「（有声の囁き声で）きもちいーですか？ よかった」

「……（集中する吐息）」

「（有声の囁き声で）これまで、  
先輩にはいーっぱい助けてもらっちゃったから」

「（有声の囁き声で）あたしからも先輩を労わってあげたい。  
大事にしたい」

「（耳元に囁く）もっともったいい気持ちになってほしーです。……（笑う）」

「（歌うように）きれいになーれ……きれいになあれ……」

「ふふ……眠くなっちゃいます？  
今日、いっぱい歩きましたからね」

「今日はゆっくり寝ましょうね」

「……（集中する吐息）」

「このくらいで……、流しますよ」

「先輩。おめめ、ぎゅーです」

「流します……」

「……（吐息）」

「……（集中する吐息）」

「あ、このへんも……」

「ん……ぜんぶ流れたかな……？」

「……（点検する吐息）」

「ん、大丈夫そう」

「水気をちょーっと絞りまして……」

「はい、タオルで包みます」

「おしまいです。おつかれさまでした」

「湯舟にどうぞ。身体、あつためてください」

「きもちよかった？ ……（笑って）あたしも楽しかったです」

「……あー、あたしも湯舟に浸かろうかな」

「一緒に入って良いですか？」

「（笑って）……失礼します」

湯舟のなかで向かい合う二人。

「ふああ……きもちいいー」

「銭湯とはまた違った良さがある……」

銭湯でこんなにくっついてたらヘンな人ですからね（笑う）

「……先輩あったかい」

「……」

「（囁き声で）せんばい」

「えへへ……呼んでみただけです」

「そだ、写真見ます？　せっかくなんで」

「えーと、こうかな」

「（耳元に）へへへ、先輩のこと抱っこしちゃった」

「座り心地はいかがですか？」

「あたしはめっちゃいい感じですよ」

「ではでは、先輩。講評よろしくお願いします」

「……防水スマホカバー、結構使いやすい」

「えーと……今日撮ったコスモスの一番のお気に入り……」

「これかなー。かわいいコスモスだったので」

「ね。花びらの縁に色がついてて、  
真ん中のこのへんは白くて……おしゃれ」

「キャンディーストライプって品種らしいですよ。名前もカワイイ」

「そして、キャンディーストライプの畑を背にした先輩……  
これもお気に入り」



「こっちは……カウンター撮影ですね」

「あたしを撮影する先輩を撮影するあたし（笑う）」

「それと……これ。先輩の横顔。……真剣でかわいい」

「まちがえた。かつこいい、です」

「銀杏並木は……まだぜんぜん緑でしたね」

「もうちょっとしたら黄色くなるのかな。  
そのときまた行きたいですねー」

「（しみじみと思い返して）……オシャレカフェのランチ、  
映えてるなあ」

「優等生な固めのプリンも最高でしたね。  
ザ・喫茶店ってかんじで」

「こういう可愛いお皿も集めたーい……」

「先輩と、気に入ったものだけ集めて暮らしたい……  
それが夢です……」

「ゆっくり、一緒に叶えていきましょう」

「今日一日で、カメラロールがピンク色まみれだー。  
コスモスに染まりました」

「あ。今日最初のほうに撮ったやつ。先輩の記念写真」

「ここからは昨日の写真……」

「……このへんもゼーんぶ記念写真ですね」

「先輩のこと新しく知った記念。  
キッチン綺麗にした記念。

コーヒー丁寧に淹れて美味しかった記念。  
退職記念」

「先輩と一緒に……毎日一緒にいる記念」

「ただの缶チューハイの写真でも。  
ほかの人が見たら、意味なんか分からないかもしれないけど」

「あたしには、ぜんぶ宝物なんです。  
どんなちっちゃなことも」

「……明日からも、宝物集めていくんだー」

「……（これからが楽しみな吐息）」

「せんぱい」

「……（笑う吐息）」

「呼んでみただけです（笑う）」

「……（長めに、ゆっくり呼吸。小さく笑う）」

【EP07：目覚まし時計をかけないで眠る】

---

○寝室

「んゝ……（伸びをする）ふう」

ベッドの上に寝転がるあなたと美彩。

「ぽかぽかですね、先輩」

「ふんふん……（匂いを嗅いで）いい匂いする……入浴剤のバニラの匂い」

「ヘアオイルのゆずの匂いも……これ好きい」

「すんすん……（匂いを嗅ぐ）はぁ……」

「……（深呼吸）」

「ふわぁ……（あくび）」

「今日、すごくいろんなことできた気がする」

「アクティブでしたねゝ……」

「『やりたいことリスト』もいっぱい達成できましたよ」

「先輩とお散歩するとか」

「先輩とおしゃれなカフェでランチするとか」

「先輩とお風呂に入るとか」

「先輩のお手伝いをしてあげるとか…そういうの」

「明日のごはんの作り置きもしたし」

「…明日やりたいことは

『ベッドからなるべく出ないでだらだらする』です」

「なんにもしないをするやつです」

「でも、本読んだり映画見たりしちゃう（笑う）」

「だから、手の届くところに読みたい本置いたんです。

散らかしてるだけって思ってた？　ちがいますー」

「（眠くなりながら、欠伸交じりに）見逃してたドラマとかも、今はスマホで見れるからべんりだし…」

「…（吐息）」

「（囁き声で）……でも、せんぱいといっしょだったら、なんにもしなくてだらだらするだけで一日経っちゃうかもなあ……」

「……（無声気味の囁きで）楽しみ……」

「……せんぱい」

「目覚ましはオフにしました？」

「……（笑って）あたしも、ばっちりです」

「贅沢ですね……」

「んん……（眠たげに呼吸）」

「おやすみなさい、せんぱい」

「……（幸せそうに笑う）」

「大好きです……」

「……………」

「（半分寝言で）せんぱい……」

「……………」

以下、  
寢息。

## 【おまけトラック】

---

### ○寝室

翌朝。

目覚ましの音もなく、自然と起床するあなた。

「ん……」

「んゝ……」

美彩もつられて目を覚まし、  
あなたの寝癖を見て笑う。

「……（小さく笑う）」

「せんぱい。そのヘアスタイル、めっちゃクールです」

「記念に一枚、いいですか？」

枕元からスマホを探り、寝癖の写真を記念撮影。

「……（満足そうな吐息）」



「宝物増えた（小さく笑う）」

「あたしもすごい？ ……（笑う）」

「せんぱい、撮って撮って。ぴーす」

「……（くすくす笑う）」

「せんぱい。ちゅーしていいですか？」

「（頬に） ……ちゅっ」

「おはようと、おやすみのちゅー」

「……（幸せそうな吐息）」

「（くすくす笑って） もう少しゆっくり眠っちゃお……」

「ね、せんぱい。一緒に……」

寝返りをうつ。美彩に抱き寄せられるあなた。

「（耳元に無声がちに囁く） おやすみなさい……」

「……………」

[.....]